HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日韓両言語の授受表現における行為の「方向性」と「完了性」
Author(s)	金, 銀珠
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 9, 101-121
Issue Date	2009-09-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39352
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCTS9_007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

jimcts

日韓両言語の授受表現における行為の「方向性」と「完了性」

金　銀珠

"Directionality" and "Completeness" of Action in Analysis of the Giving and Receiving Expressions in Japanese and Korean

KIM Eunju

abstract

This paper compares the giving and receiving expressions of Japanese and Korean from the viewpoint of "directionality" and "completeness" of action. These terms have not previously been used in explaining the meaning and function of "-te ageru, -te kureru" sentences in Japanese, and "-e cwuta" sentences in Korean. I perform a questionnaire survey to native speakers of both languages in order to analyze what kind of differences exist between "-te ageru, -te kureru" and "-e cwuta".

Our results show that "constraints of directionality" and "constraints of completeness" of action are relevant to the difference between the two languages. The paper clarifies that "-te ageru, -te kureru" expressions are sensitive to the directionality of the act from "uchi" to "soto" and vice versa. On the other hand, Korean "-e cwuta" expressions have constraints on the "completeness of action" which is performed.

1 はじめに

日本語における授受動詞には、基本的に「ヤル（アゲル）」、「クレル」、「モラウ」があり、その敬語形式である「サシアゲル」、「クダサル」、「イタダク」を加えれば七語体系になる。それは、「give、receive」の二語体系で授受関係が表わされる英語、与え手主語・受け手主語が対立するだけの二語体系で表わされる中国語、「주다（cwuta）[1]［クレル・ヤル・アゲル］」、「드리다（tulita）［サシアゲル］」、「받다（pat-ta）［モラウ・イタダク］」の三語体系で表わされる韓国語に比べて極めて複雑である。さらに、日本国内どこでもが、この七語体系をもっているわけではない。日本国内でも、授受動詞に関して諸方言の対照研究が必要となって来ると指摘されている（奥津［1983］）。

このような複雑な体系を持つ日本語の授受表現[2]は、「視点」、「人称関係」、「待遇関係」などの要素が絡みあい、日本語学習者にとって非常に難しい文法項目の一つとなっている。話し手がどの立場に立つか、主語となる者が与え手か受け手か、敬語か非敬語かなどによって日本語の授受表現はその使い分けが大きく変わってくるからである。文法の構造体系が非常に似ていると言われている韓国語の場合でさえ、授受表現の意味と用法は日本語と大きく異なる。そのため、他の文法項目に比べ、韓国人日本語学習者の日本語の授受表現における誤用は、習得過程において長期間に渡って繰り返されている。

以上のことから、日本語の授受表現に関しては、これまで様々な研究が行われてきた。特に、「視点・人称制限」（大江［1975］、久野［1978］、寺村［1982］、牧野［1996］）、「待遇性」（井出他［1986］）、「方向性」（森越［1994］、山田［2004］）などといった要素からのアプローチが多く見られる。一方、韓国語の授受表現に関しては、「恩恵」（최현배［1929］、남기심·고영근［1985］、이주행［2000］、이익섭［2005］）や「待遇性」（손세모돌［1991］、박선옥［2005］）といった要素からの分析がほとんどである。そして、日韓対照研究に関しては、対応関係の不一致などの相違点を指摘している研究（林八龍［1980］、奥津［1983］等）が多く見られており、最近は「視点・人称制限」（林美淑［2000］）や「移動・恩恵」（韓京娥［2008］）における相違点についても少しずつ研究が進められてきている。

ところで、両言語のそれぞれの研究の手法を考察してみると、両者は分析の観点がかなり異なることが見受けられる。また、対照研究においては、ほとんどの研究が対応関係の不一致などの相違点を指摘しているもので、他の分析要素を取り入れた考察は、まだ十分に行われていない。

従って本稿では、「～テアゲル·クレル」と「－어　주다（-e cwuta）[3]［～テアゲル・クレル］」の意味機能を、今まであまり取り上げられてこなか

►1 本稿での韓国語のローマ字表記は、Samuel E. Martinによる Yale式（The Yale Romanization System）に従っている。

►2 授受関係を表す表現には「受益表現」のほか、「受給動詞」、「やりもらい動詞」などといった色々な言い方がある（豊田［1974］）が、本稿では、「授受表現」という用語を用いる。なお、「授受表現」のうち、主に恩恵や利益の行為を表す「授受補助表現」について考察する。

►3 「-어 주다（-e cwuta）」のほかに「-아 주다（-a cwuta）」で表される場合がある。「-아（-a）」は母音「ㅏ、ㅗ」で終わる語幹の後ろに,「-어（-e）」はその以外の母音で終わる語幹の後ろに用いられる。日常会話では「-어 주다（-e cwuta）」のほうが用いられる確率が高いため、本稿では「-어 주다（-e cwuta）」を用いる。

った行為の「方向性」と「完了性」という要素から分析し、日韓授受表現の意味機能を明らかにすることを目的とする。

以下では、次のような手順で論を進める。第2節では、まず、今日まで行われてきた研究を概観し、日本語と韓国語の授受表現の意味機能がどのように提示されてきたかを検討する。次に、先行研究の問題点について述べる。第3節では、従来の研究を踏まえ、「行為の方向性」制約と「行為の完了性」制約を仮説として提示し、本稿の捉え方を述べる。第4節では研究方法を述べ、第5節では分析結果をまとめる。第6節では、「〜テアゲル・クレル」と「ー어　주다（-e cwuta）［〜テアゲル・クレル］」の意味的な特徴を「行為の方向性」制約と「行為の完了性」制約という観点から比較する。第7節では、本稿の結論と今後の課題を述べる。

2　先行研究及び問題点

ここでは、日本語と韓国語の授受表現が従来の研究ではどのように取り扱われてきたかについて概観し、その問題点を指摘する。まず、以下に日本語に関する研究、韓国語に関する研究、両言語の対照研究という順で概略を述べる。紙面の都合上、本稿と直接関係がある研究のみを概観する。

2.1.　日本語の授受表現に関する研究

日本語の授受表現に関する主な研究としては、「視点・人称制限」（松下［1928］、宮地［1965］、豊田［1974］、大江［1975］、久野［1978］、寺村［1982］、牧野［1996］）、「待遇性」（井出他［1986］、原田［2006］）、「方向性」（森越［1994］、山田［2004］）などがある。本稿と直接関係する研究の内容は以下のとおりである。

まず、「視線の軸」や「主観性」という語を用い、「〜テヤル、クレル、モラウ」の視点制限について説明した研究としては、大江（1975）がある。大江（1975：51）は、「〜テヤル、クレル、モラウ」の「〜」の部分は一般に「恩恵的行為」を表すとし、誰の行為が誰に対して恩恵的であると話し手が感ずるかに応じて補助動詞の「ヤル、クレル、モラウ」のいずれかが選択されるとする。「〜テクレル、モラウ」の文は被行為者が行為者に対して「感謝」、「期待」のような主観的感情をもっていることが示唆されるし、「〜テヤル」の文は行為者の側に、被行為者から「感謝を受ける資格を有する」という気持ちがあることを含意すると述べている。

久野（1978：129-163）も、「共感度」[4]という概念を用いて、視点の違いという観点から授受表現にみられる日本語特有の言語現象を説明している。久野は、「視点（カメラ・アングル）」がどこに置かれるかには種々の要因に基づく制約があるとし、「補助動詞「クレル・ヤル」の視点制約」、「貰うの視点制約」という法則を以下のように仮定している。

►4　久野（1978）は「共感度」に関して次のように説明している。文中の名詞句のx指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感（Empathy）と呼び、その度合、即ち共感度をE（x）で表す。共感度は、値0（客観描写）から値1（完全な同一視化）迄の連続体である。（久野［1978：134］）

(1)〈補助動詞「クレル・ヤル」の視点制約〉

補助動詞としての「クレル・ヤル」の視点制約は独立動詞としての「クレル・ヤル」のそれ[5]と極めて類似している。ただ、「〜テヤル」は中立的な視点（E（主語）＝E（非主語））では用いられない。

〜テクレル　E（非主語）＞E（主　語）
〜テヤル　　E（主　語）＞E（非主語）　　（久野［1978：152］）

〈貰うの視点制約〉

「モラウ」は、話し手の視点が非主語よりも主語寄りの時にのみ用いられる。

モラウ　　E（主　語）＞E（非主語）　　（久野［1978：160］）

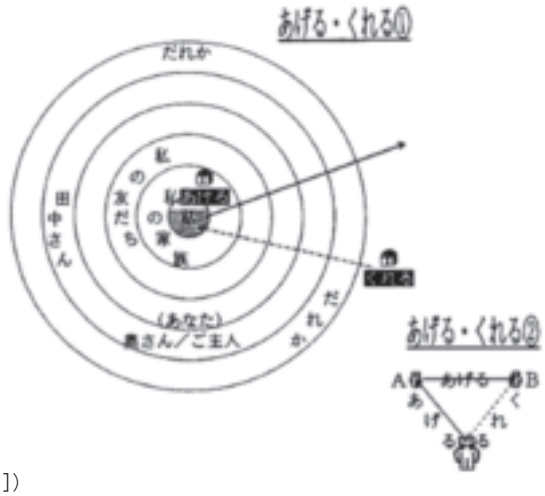
次に、日本語と西洋語における授受表現の違いを人称制限に基づいて記述したものには、寺村（1982）がある。寺村（1982：133-134）は、主語が一人称、二人称、三人称であるか、単独であるか複数であるか、あるいは「男性」であるかどうか、によって動詞の形が決まってくる西洋語に対し、日本語は、「誰が誰に対して」ものや行為の効果が移動するのか、という「相対的」制約が動詞の形を決定すると述べている。「人称」ということで、西洋語のそれと区別されるもう一つの重大な点は、いわゆる「一人称」は、話し手自身だけでなく、その授受関係において、話し手が自分の側にあるもの、「内側」のものと意識するものはすべて入る、「二人称」「三人称」にとってもこの事は同じであると分析している。

久野や寺村の分析を参考に牧野（1996：70-79）は、「ウチ・ソト」という空間概念を介して言語と文化の関わり合いを考察している。そこには日本人のウチ空間の感覚的な使い方が日本語の文法の中にも平行して出ているとし、授受動詞を「共感」や「ウチ・ソト」の概念と結びつけて説明している。牧野は、授受補助動詞において、「〜テアゲル」ではやり手が「ウチ人称」をとり、「〜テクレル」では受け手が「ウチ人称」をとると述べている。

そして、「方向性」を取り上げ、授受表現について考察したものには、森越（1994）がある。森越（1994）は、「アゲル・クレル」を説明するため、以下の図を提示している。

►5 「授与動詞の視点制約」に関し、久野（1978）は以下のように説明している。
「クレル」は、話し手の視点が、主語（与える人）よりも与格目的語（受け取る人）寄りの時にのみ用いられる。「ヤル」は、話し手の視点が主語寄りか、中立の時にのみ用いられる。「モラウ」は、話し手の視点が与格目的語よりも主語寄りの時にのみ用いられる。
クレル
E（与格目的語）＞E（主語）
ヤル
E（主語）≧E（与格目的語）
（久野［1978：152］）

■ 図1 「アゲルークレル」の「同心円モデル」



（森越［1994：161］）

この「同心円モデル」は、授受動詞の移動の方向、及び「私」を中心とした人間関係を表したものである。図1に基づくと、「アゲル・クレル」の「行為の方向性」は次のように説明される。「アゲル」はウチ[6]の者（私）が主語となり、ウチの者からソトの者に向かって「行為の方向性」がある。もしくは、ソトの者が主語となり、ソトの者からよりソトの者に向かって「行為の方向性」がある。逆に、「クレル」はソトの者が主語となり、ソトからウチの者（私）に向かって「行為の方向性」がある。

これに類似した研究として、寺村（1982）は、話し手を中心とした動きの方向性という点で、「アゲル」は「行ク」と、「クレル」は「来ル」と共通した性格を持つ語であると指摘している。さらに、前者は自己の範囲内のものを指す「コ」の系列と、後者は話し相手の範囲のものを指す「ソ」の系列と共通していると言及している。図2は、寺村の観点に基づいて「行ク―来ル」の移動の方向を表わしたものである（拙者［2007］）。

■ 図2 「行ク―来ル」の移動の方向

（金［2007：253］）

図2の「行ク・来ル」の移動の方向を図1の「アゲル・クレル②」の行為の方向と比べてみると「行ク―アゲル」、「来ル―クレル」は全く同様の方向性を持つことがわかる。

以上、日本語における授受表現の研究は、「視点・人称制限」、「待遇性」、「方向性」に焦点が置かれていると言えよう。

►6 「ウチ（in-group）」と「ソト（out-group）」は相対的な概念で考えるものである。例えば、「妹」は話者である私と比べ、「よりソトの人間」であるが、第三者と比較するときは「よりウチの人間」であるため、相対的であるとされる。

2.2. 韓国語の授受表現に関する研究

韓国語の授受表現に関する主な研究としては、「恩恵」（최현배［1929］、남기심·고영근［1985］、방운규［1994］、이주행［2000］、성태수［2000］、이익섭［2005］）や「待遇性」（손세모돌［1991］、박선옥［2005］）などがある。

「-e cwuta」の意味的特徴に関して最初に言及したのは、최현배（1929）である。최（1929：402）は、「-e cwuta」が他人に仕える意を表す「奉仕補助動詞」であるとする。남기심・고영근（1985：123）、이주행（2000：160）など、従来の多くの研究がこのような見解を示している。

성태수（2000）は、「-e cwuta」構文は独立的な意味の役割を割り当てることができず、ただ動詞に「奉仕」や「利益」を提供するという意味を加える役割だけを持つと述べている。

一方、손세모돌（1991）は、「-e cwuta」の意味機能が、従来の捉え方であった「奉仕」ではなく、「＋有益性」についての話し手の判断（心理的態度）であると指摘している。また、経験者の人称関係、適切な文脈といった要素が、「-e cwuta」と先行動詞との選択の制約に関与すると述べている。さらに、「-e cwuta」が婉曲的で丁寧な表現であるという「待遇性」を指摘した。

이익섭（2005：321）も、従来の「奉仕」という命名を批判し、補助動詞「-e cwuta」は、本動詞が示す行為が誰かに恩恵を与える行為であると述べ、「-e cwuta」の意味は「施恵」であると述べている。

このように、「-e cwuta」は、研究者によって「奉仕」、「利益」、「有益」、「施恵」の意味を持つものとして把握されてきたが、これらは全てほぼ同じ概念のように思われる。

また、방운규（1994）は、「-e cwuta」は「奉仕」、「期待充足」、「親近感」、「強調」などの意味を持っていると述べ、「-e cwuta」の文法的特徴について次のように説明している。

1）「-e cwuta」には他の補助動詞と同様に意向法、尊敬法、時制法が実現する。
2）「-e cwuta」構文では、主語が行為者である場合は制約がないが、そうでない場合は制約される。
3）「-e cwuta」は、ほとんど全ての動詞と統合できる。
4）本動詞と「-e cwuta」の間には「～는（-nun）［～ハ］」、「～도（-to）［～モ］」、「～만（-man）［～ダケ］」の三つの補助助詞だけが挿入できる。
5）「本動詞＋連結語尾　주다（cwuta）」の構成において、連結語尾として用いられるのは「～어（-e）」のみである。

そして、「-e cwuta」が待遇表現の一つであると主張するものとしては、박선옥（2005）がある。박선옥（2005：202）は、誰かに何かを依頼するか、命令するときに本動詞に命令形語尾だけを用いた命令文よりは、補

金 銀珠 KIM Eunju

助動詞「-e cwuta」を用いてその命令の意味をもう少し柔らかく丁寧に表現する効果があると述べている。

以上、韓国語における授受表現の研究は、「恩恵」に関するものが最も多く、その他に「待遇性」を指摘している研究が若干見られることを指摘した。

2.3. 日韓両言語の授受表現に関する対照研究

日韓両言語の授受表現に関する主な対照研究としては、「対応関係の不一致」（林八龍［1980］、奥津［1983］）、「視点·人称制限」（林美淑［2000］、金昌男［2001］、李孝貞［2005］）、「移動・恩恵」（韓京娥［2008］）などの相違点を指摘したものがある。ここでは、本稿と直接関係する韓京娥（2008）についてのみ概観する。

韓（2008）は、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」構文の意味機能について、本動詞「アゲル·クレル」と「주다（cwuta）［アゲル·クレル］」の「移動」と「恩恵」という意味的特徴との関連から、その相違点を考察している。基本的な主張は次のとおりである。

「～テアゲル・クレル」は、実際具体物の「移動」があってもなくてもよく、「恩恵」のみを表すとする。一方、「-e cwuta」は、具体物の「移動」を必ず意味し、「恩恵」は物の移動に伴い語用論的に生じるものと考えている。

この一般化を提示するために、まず、第一の観察として、「マダ～シテイナイ」という打消し節と共起できるかどうかのデータを挙げている（韓［2008：81］）。このデータによると、「～テアゲル・クレル」の後には打消し節が共起可能だが、「-e cwuta」の後では不可能となる。韓（2008）はこの観察から上の一般化を提案している。この観察上の一般化の妥当性を、韓（2008）は以下の言語現象に基づき、議論し実証を試みている。

まず、「～テアゲル·クレル（恩恵）」と「-e cwuta（移動）」の違いは、「省略可能性の差」に反映されているとする。その反映として、日本語では「～テアゲル・クレル」の省略が可能であるが、韓国語では「-e cwuta」の省略が不可能であるとする。

次に、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の違いは、「連体修飾節における時制の差」にも反映されているとする。品物は買ったがまだ渡していない状況で、授受補助動詞の時制は、日本語では過去形が用いられるが韓国語では非過去形が用いられるとする。

最後に、「疑問文での適格性」にも「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の違いが反映されていると述べている。二人称から一人称へ物が移動する場合、日本語では「カバン作ッテクレタ？」のように「～テクレル」を用いた疑問文が可能だが、韓国語では「～テクレル」を用いた疑問文は不適格であると述べている。韓国語でこのような疑問文が不適格となるのは、話し手がすでに物を受領しており、わざわざ聞き手に自分に物をくれたかどうか問いかける必要がないためであると説明している。

以上、日韓両言語の授受表現に関する対照研究は、授受補助動詞の対応

関係の不一致の指摘にとどまる研究がほとんどである。一方、「人称制限」と「視点」を中心に分析している研究や「移動」と「恩恵」という意味的特徴の相違に注目する研究なども、最近少しずつ発表されつつある。

2.4. 先行研究の問題点

以上、従来の授受表現の研究について概観してきた。本節では、先行研究の問題点について検討する。従来の研究の問題点としては、大きく以下の三つを挙げることができる。

まず、前節で確認してきたように、日韓両言語の授受表現に関する個々の研究は今まで数多く行われてきたが、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」に関する対照研究はまだ十分とは言えない。

林（2000）は、韓国人学習者に見られる日本語の授受表現の習得過程を調査し、「日本語の授受表現の複雑な形式による韓国人学習者の授受動詞間の混乱、特に「～テアゲル」と「～テクレル」の使い分けが学習者においてなによりも問題となる」と指摘している。よって、両言語の授受表現のうち「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を中心に、両言語を対照することが必要である。

もう一つは、従来の対照研究では、対応関係の不一致などの相違点を指摘しているものがほとんどで、まだ十分な考察が行われていないという問題点がある。日本語教育では、授受表現を論ずる際、「行為の方向性」を非常に重要な要素として捉えている（森越［1994］）。また、行為が完了しているか未完了であるかといった「行為の完了性」も両言語の授受表現の意味機能に影響を与えると思われる。しかし、このような「行為の方向性」や「行為の完了性」と関連づけた研究は管見の限りでは見当たらない。従来の研究であまり取り上げられてこなかった「行為の方向性」、「行為の完了性」という要素に着目し、両言語を比較・分析することは、日韓対照研究の発展に有益であると考えられる。

最後に、日韓対照研究としては最も新しく、本稿の考察の土台となっている韓京娥（2008）についていくつか問題点を挙げる。韓（2008）の考察の基本的な問題点としては、以下の二点を挙げることができる。

一つは、韓（2008）は「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の意味機能について、「～テアゲル・クレル」は「恩恵」、「-e cwuta」は「移動」のみを表すと考えている点である。例えば、以下の「～テアゲル・クレル」構文を考察してみよう。

(2) ［14］[7]私があなたにプレゼントを｛買った／買ってあげた｝。
［15］私にプレゼントを｛?？買った／買ってくれた｝。
（韓［2008：82］）

►7 ［ ］内の数字は引用文献中のオリジナルの番号を表す。

韓（2008）の主張では、日本語 (2) ［14］の「～テアゲル」は、プレゼントや絵の移動を表すのではなく、話し手が与える恩恵を意味し、省略可能となると説明している。一方、(2) ［15］の場合は「～テクレル」を

省略すると、(2)［14］の「～テアゲル」の省略に比べ、適格性が下がるとする。韓（2008）は、このような違いを「～テアゲル・クレル」の表す「移動」の差ではなく、相手への有り難さが表現されていない、語用論的な要因による差であると指摘している。

しかし、(2) のような言語現象を単に「恩恵」や語用論的な要因だけで片づけることにはやや抵抗がある。その根拠を以下の例で確認してみよう。(T：日本語教師、L：日本語学習者)

(3) T：張さん、昨日、欠席でしたね。どうしたんですか。
#L：すみません。姉が電話しました[8]。
T：え？　お姉さんから電話はありませんでしたよ。
L：いいえ、姉が電話しました。彼女は病気になりましたから、手伝ってほしいと言いました。
T：ああ、お姉さんからあなたのところに電話があったのですね。
新屋（1999：52）

►8　本研究を通じて例文の文法性、自然さの度合いを次のように示す。「＊」は非文法的、誤りの文、「？？」はかなり不自然な文、「？」は少しおかしな文で完全に文法的としては受け入れにくい文。「＃」は、単独の文としては適格文であるが、この文脈の中では不適格であることを示す。

(3) に示されるように、「姉ガ電話シマシタ」という表現は、上記の文脈では不適格であるとされる（新屋［1999］）。上のような人称関係において、「電話（ヲ）スル／シタ」を用いた文が適格性を持つには、典型的に以下のような言い方が考えられる。

(4) a. 姉が（私に）電話してきました。
b. 姉が（私に）電話してくれました。

一般的に、行為がソトの者（姉）からウチの者（私）へという方向性を持つ構文の場合は、(4) のように「～テクル」あるいは「～テクレル」を用いなければならない。ここで、「～テクル」を用いた文と「～テクレル」を用いた文の差は、「恩恵」の意味を含意するか、含意しないかというところにある。つまり、「～テクレル」は「恩恵」のニュアンスを伴うのに対し、「～テクル」は「恩恵」のニュアンスを全く伴わないということである。(3) のような文脈では、話し手に「恩恵」のニュアンスが全く感じられないので、(4a) が最も適格性を持つと言える。

ここで注目すべき点は、次のとおりである。(3) のような状況で、文が適格性を持つには、「恩恵」の意味を含意する「～テクレル」よりも、むしろ「恩恵」の意味を全く含意しない「～テクル」を用いなければならないということである。つまり、「恩恵」を表さなくても良い場合には「～テクレル」を用いる必要がないということになる。この点を考慮すると、(2)［15］の「「買ッタ」が不自然であるのは、相手への有り難さが表現されていないためであり、「恩恵」を表す「～テクレル」の形式を用いなければならない」と考える韓（2008）の見解が絶対的ではないということを示す。仮に、韓（2008）が指摘するように、(2)［15］が「恩恵」だけの問題であるとするならば、「恩恵」のニュアンスを全く伴わない「買

ッテキタ」という表現は決して用いられないはずである。しかし、(2)［15］の文も「恩恵」を表さなくても良い場合には、(5) のように「～テキタ」を用いることもできるのである。

(5) 私にプレゼントを買ってきた。

以上の考察は、韓（2008）の主張する「恩恵」だけでは、「～テアゲル・クレル」構文の意味機能を十分に説明できないということを示唆する。

もう一点は、両言語の授受表現の適格性を判断するために韓（2008）が用いた例文は、それぞれの文において条件（行為の完了・未完了）が異なるということである。以下で例を示し、韓（2008）がどのような条件を文に設定し、見解を述べているかについて考察する。

(6)［18］（かばんの受取人が話し手の場合）

a. かばんを作ってくれた。　／　かばん、作ってくれた？
b. 가방을　만들어　주었다.　／＊가방、만들어　주었어？
kapang-ul mantul-e cwu-essta.　／ *kapang, mantul-e cwu-esse?
かばん-を　作る-て　与える-た　／　かばん、作る-て　与える-た
（韓［2008：83］）

韓（2008）は、日本語の（6）［18a］の「～テクレル」は平叙文でも疑問文でも適格文であるのに対し、韓国語の（6）［18b］の「-e cwuta」は物の移動を必ず含意するために、疑問文では不適切となるとする。つまり、(6)［18a］は「恩恵」のみを含意し、(6)［18b］は「移動」のみを含意するため、適格性に違いがあると結論づけている。

ところで、(6)［18］の適格性判断については、やや疑問を感じる。以下の例を見られたい。

［行為が完了している場合］

(7)（かばんの受取人が話し手の場合）

a. かばんを作ってくれた。　／ かばん、作ってくれた？
b. 가방을　만들어　주었다.　／ 가방、만들어　주었어？
kapang-ul mantul-e cwu-essta.　／ kapang, mantul-e cwu-esse?
かばん-を 作る-て 与えるーた　／ かばん、作る-て 与える-た

インフォーマントによると、行為が完了している場合は、(7) に示されている全ての文が適格文となる。一方、以下の行為が完了していない場合を見てみよう。

［行為が完了していない場合］

(8)（かばんの受取人が話し手の場合）

a. ？かばんを作ってくれた。　／ かばん、作ってくれた？

b. ？가방을　만들어　주었다.　　／ ？가방、만들어　주었어？
? kapang-ul mantul-e cwu-essta.　／ ? kapang, mantul-e cwu-esse?
？かばん-を 作る-て 与える-た　／ ？かばん、作る-て　与える-た

行為が完了していない場合は、日本語の疑問文（8a） の場合のみ適格文となり、それ以外は不自然となる。

（7、8）の例を基に、韓（2008）が提示した（6）［18］の適格性判断を注意深く考察してみると、韓（2008）は、平叙文においては行為が完了している場合の判断を提示し、疑問文においては行為が完了していない場合の判断を提示していることがわかる。ところが、韓（2008）が「「-e cwuta」を使った場合、話し手はすでにかばんを受領しており、わざわざ聞き手に自分にかばんをくれたかどうか問いかける必要はない」と述べていることから、韓（2008）は、平叙文と疑問文ともに「行為が完了している」ことを前提として適格性を判断しているように思われる。しかし、（7b）のように韓国語の疑問文も行為が完了している場合は適格文となりうる。この点から考えると、「「～テクレル」は平叙文でも疑問文でも適格文であるのに対し、「-e cwuta」は物の移動を必ず含意するために、疑問文は不適切となる」と主張する韓（2008）の見解は矛盾するということになる。これは、「-e cwuta」の選択が、「移動」の意味的特徴ではなく、「行為の完了・未完了」によって左右されるということを示唆する。

なお、韓（2008）によると、話し手がかばんを受け取ったことを忘れてしまい、聞き手にかばんの授与を確認している文脈では（6）［18b］が適格になるとする。また、「かばんをくれなかったのではないか」という反語の解釈も可能であるとする。しかし、韓（2008）はこれらの文脈を分析の対象とはしていない。ところが、これらが表す状況は全て、本稿で提示している行為が完了していない場合と同等であるとみなすことができる。換言すると、話し手は聞き手からまだかばんを受け取っていない（行為が完了していない）と思っているため、「確認する」わけであり、「かばんをくれなかったのではないかと、反語を用いる」ことができるのである。従って、本稿では、「行為の完了性」という面をはっきり出すために、行為が完了している場合も、「確認」、「反語」の文脈などの行為が完了していない場合もすべて考察の対象とする。

以上、「ウチ･ソト」間の行為の「方向性」や「行為の完了･未完了」は、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を分析する際、非常に重要な要素であることがわかった。しかし、韓（2008）の分析では、「移動」と「恩恵」の二つの側面に重点を置くあまり、このような要素については考慮されていない。「移動」と「恩恵」という二つの側面だけを用いる研究方法では、両言語の授受補助動詞の相違を十分に説明することができないと思われる。つまり、「～テアゲル･クレル」と「-e cwuta」構文の相違には、韓（2008）が主張する「移動」と「恩恵」の意味的特徴のほかに、行為の「方向性」や「完了性」といった要素も考慮に入れるべきであると思われる。従って、以下では、行為の「方向性」と「完了性」を仮説として提示し、論を進める。

3 仮説

ここでは、従来の研究を踏まえ、「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」は、「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約の関与の仕方が異なると予測し、次の二つの仮説を立てた。

1）日本語の「〜テアゲル・クレル」は、「ウチ」と「ソト」間の「行為の方向性」制約に影響される。「主語：ソト、与格目的語：ウチ、ソト→ウチ」の方向性を持つ「〜テクレル」は「有標」の標識を好む。それに対し、「主語：ウチ、与格目的語：ソト、ウチ→ソト」の方向性を持つ「〜テアゲル」は、状況によって「有標」、「無標」の標識[9]を使い分ける。
2）韓国語の「-e cwuta」は、「行為の完了性」制約に影響される。「-e cwuta」は完了のアスペクトを表す要素であり、「行為の完了性」制約はこの補助動詞のアスペクチュアルな特性に由来する。

この二つの仮説を検証するため、以下では「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約における本稿の捉え方を述べる。

3.1. 「行為の方向性」制約

ここではまず、「行為の方向性」制約における本稿の捉え方を簡単に述べる。話し手を中心とした動きの方向性という点で、「アゲル」は「行ク」と、「クレル」は「来ル」と共通した性格を持つ語であるということを既に2節で確認した。それで、「アゲル・クレル」の方向性を理解しやすくするため、まず「行ク・来ル」の方向性を次に示す。

(9) a. 今から大通公園へ行くけど、加藤さんも {来る／行く} ？
　　b. はい、{＊来ます／行きます}。

聞き手が大通公園にいることを前提として発話している場合は、(9a)のように、まだその場にいなくても「加藤サンモ来ル？」と発話することができる。さもなければ、話し手は大通公園へまだ行っていないので、「加藤サンモ行ク？」と聞かなければならない。これに対し、応答者は(9b)のように「来ル」を用いることができず、「行ク」でしか表現することができない[10]。このように、「ウチ・ソト」間の行為の方向によって「行ク・来ル」の選択が変わってくるのである。

この「行ク・来ル」と同様に、「アゲル・クレル」も方向性が非常に強い動詞である。以下の例を見てみよう。

►9 本稿でいう「有標形式」とは、「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を用いた形式を示し、「無標形式」とは、「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を用いない形式を示す。

►10 図2を参照。

金 銀珠 KIM Eunju

(10)　a. 私は友達に連絡しました。
　　b. 私は友達に連絡してあげました。

(11)　＊a. 友達が私に連絡しました。
　　b. 友達が私に連絡してきました。
　　c. 友達が私に連絡してくれました。

(10) が示すように、行為がウチの者（私）からソトの者（友達）へという方向性を持つ場合は、補助動詞「～テアゲル」は必須ではない。一方、行為がソトの者（友達）からウチの者（私）へという方向性を持つ (11) のような場合は、「～テクル」あるいは「～テクレル」を用いなければならない。このように、「ウチ・ソト」間における行為の方向によって「～テアゲル・クレル」の使用が制約される。これが、「行為の方向性」の制約である。

3.2. 「行為の完了性」制約

次に、「行為の完了性」制約について述べる。「行為の完了性」制約は、行為が完了したか完了していないかということを問うものである。以下の例を見てみよう。

(12)（話し手が隣にいる加藤さんに聞く）
　　＊加藤さん、もう家に帰った？

(12) のように、行為がまだ完了していない（加藤さんがまだ家に帰っていない）状況で、「帰ッタ」は用いることができない。それは、「帰ッタ」が「完了性」を含意するため、今そばにいるのに加藤さんが帰ったかどうかを聞くのは、意味論的・論理的に矛盾する。一方、行為が既に完了している (13) のような文脈では「完了性」を含意する「帰ッタ」は用いることができる。

(13)（話し手が加藤さんの家に電話をかける）
　　加藤さん、もう家に帰った？

このように、行為が完了しているか、未完了であるかという「行為の完了性」は、文法性判断に大きな影響を与えるのである。

以上、「行為の方向性」制約と「行為の完了性」制約が文使用に決定的な影響を与えるということがわかった。従って本稿では、「～テアゲル・クレル」と「－어 주다 (-e cwuta)［～テアゲル･クレル］」の意味機能を、今まであまり取り上げられてこなかった「行為の方向性」と「行為の完了性」という要素から分析し、日韓授受表現の意味機能を明らかにすることを目的とする。以下では、3節で立てた仮説を検証するため、本稿の研究方法を述べ、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の間にどのような相違

が見られるかについて考察する。

4 研究方法

「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を用いた文の文法性判断は、インフォーマントによってかなり異なる。その判定は必ずしも容易ではなく、直感だけに基づいた判定では主観的なものになりかねない。そこで、本稿では、より高い客観性を図るため、両言語の母語話者を対象に質問紙調査を行なった。

調査の対象者は総115名で、日本語母語話者60名（札幌地域中心）、韓国語母語話者55名（ソウル地域中心）である。質問紙の形態は日本語版と韓国語版の二通りである。調査方法は選択形式による回答で、自然だと思われる箇所に〇を求めた。

調査に使用した日本語の質問紙の項目は全24項目である。本調査で想定している状況は、「プレゼントヲ買ッタ」という事態である。まず、「方向性」による違いを調べるため、「私（一人称）」、「あなた（二人称）」、「鈴木サン（三人称）」という「人代名詞」を上の事態に適用させ、出現可能なあらゆる種類の文を作成した。また、「〜テアゲル・クレル」の使用を調べるため、これらの文を「無標形式」、及び、「有標形式」に改めた。次に、「行為の完了性」による違いを調べるため、行為の完了（プレゼントの受け渡しが既に完了している状況）、及び、行為の未完了（プレゼントの受け渡しがまだ完了していない状況）という二つの条件を設けた。そして、より日常会話に近づけるために文末に終助詞「ノヨ」を付け加えた[11]。韓国語の質問紙の項目も上記と同じ方法で作成した。紙面の都合上、質問紙の内容は省略する。得られたデータから、「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の間に相違が見られるかどうかを考察する。もし相違が見られる場合、その相違はどのような要因によって引き起こされるのであるかを分析・考察する。

►11 終助詞「ノヨ」または「ノ」の付け加えは、本稿の議論と直接的に関係するものではない。

5 分析結果

質問紙調査を分析したところ、次のような結果が得られた。表の網かけ部は過半数以上の使用率を示し、下線部は、使用率が過半数までには至らないが、過半数に近い使用率（4割以上）を示す。そして、「〜テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を用いないものを「無標」、それらを用いるものを「有標」とする。また、①は一人称、②は二人称、③は三人称を示すもの

であり、「→」は行為の方向を表す。「完了」は行為が完了している場合、「未完了」は行為が完了していない場合を示す。

■ 表1 「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の使用状況

人　称	標識の有無	日本語		人　称	標識の有無	韓国語	
		完　了	未完了			完　了	未完了
		合計(%)	合計(%)			合計(%)	合計(%)
①→②	無標	33(50.0)	47(78.3)	①→②	無標	12(21.8)	31(56.4)
①→②	有標	38(63.3)	25(41.7)	①→②	有標	38(69.1)	6(10.9)
②→①	無標	12(20.0)	9(15.0)	②→①	無標	14(25.5)	18(32.7)
②→①	有標	39(65.0)	21(35.0)	②→①	有標	34(61.8)	8(14.6)
③→①	無標	12(20.0)	17(28.3)	③→①	無標	10(18.2)	20(36.4)
③→①	有標	53(88.3)	31(51.7)	③→①	有標	45(81.8)	8(14.6)
①→③	無標	28(46.7)	43(71.7)	①→③	無標	11(20.0)	27(49.1)
①→③	有標	45(75.0)	26(43.3)	①→③	有標	44(80.0)	7(12.7)
②→③	無標	16(26.7)	26(43.3)	②→③	無標	13(23.6)	20(36.4)
②→③	有標	35(58.3)	19(31.7)	②→③	有標	32(58.2)	9(16.4)
③→②	無標	23(38.3)	40(66.7)	③→②	無標	11(20.0)	25(45.5)
③→②	有標	41(68.3)	30(50.0)	③→②	有標	39(70.9)	13(23.6)

本調査による適格性判断を考察してみると、ある項目だけに選択が集中するといった偏りはなく、散らばりが大きいことが確認できる。しかし、だからといって、全体的に見られる傾向を看過するわけにはいかない。そこで、本稿では、使用率が4割以上である項目を不自然ではないと判断し、考察を進める。

6 考察

ここでは、前述した分析結果を基に、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」を比較する。両者には相違点が見られるのか、もし相違点が見られるのであれば、そのずれを引き起こす要因は何かを考察する。以下では、紙幅の都合上、「一人称と二人称間」での相違のみを説明する。それ以外の人称間での考察に関しては、全体を整理した表だけを示し、詳しい説明は省く。

6.1. 「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の文法性の比較

ここでは、両言語における「一人称と二人称間」の文法性において、どのような相違が見られるかを比較する。以下の例を考察してみよう。文の後の数字は使用率を表す。

[行為が完了している場合：一人称→二人称]

(14) a.　(私が) あなたにプレゼントを買ったのよ。(50%)
　　b.　(私が) あなたにプレゼントを買ってあげたのよ。(63.3%)
(15) a. ?(내가) 너에게 선물을 샀어. (21.8%)
　　b.　(내가) 너에게 선물을 사 줬어[12]. (69.1%)

[行為が完了している場合：　二人称→一人称]

(16) a. ?(あなたが) 私にプレゼントを買ったのよ。(20.0%)
　　b.　(あなたが) 私にプレゼントを買ってくれたのよ。(65.0%)
(17) a. ?(네가) 나에게 선물을 샀어. (25.5%)
　　b.　(네가) 나에게 선물을 사 줬어. (61.8%)

[行為が完了していない場合：一人称→二人称]

(18) a.　(私が) あなたにプレゼントを買ったのよ。(78.3%)
　　b.　(私が) あなたにプレゼントを買ってあげたのよ。(41.7%)
(19) a.　(내가) 너에게 선물을 샀어. (56.4%)
　　b. ?(내가) 너에게 선물을 사 줬어. (10.9%)

[行為が完了していない場合：二人称→一人称]

(20) a. ?(あなたが) 私にプレゼントを買ったのよ。(15.0%)
　　b. ?(あなたが) 私にプレゼントを買ってくれたのよ。(35.0%)
(21) a. ?(네가) 나에게 선물을 샀어. (32.7%)
　　b. ?(네가) 나에게 선물을 사 줬어. (14.8%)

まず、行為が完了している場合から考察してみよう。行為が「一人称→二人称」方向の日本語（14）は、「買ッタ／買ッテアゲタ」の両方が適格文であり、「～テアゲル」を用いても用いなくても文が成立する。一方、韓国語（15）は、「사 주었다（sa-(a)cwu-essta）[買ッテアゲタ]」は適格文であるのに対し、「-e cwuta」を省略した「샀다（sa-(a)ssta）[買ッタ]」だけで表すと不自然となる。次に、行為が「二人称→一人称」方向の日本語（16）は「買ッテクレタ」で表すと適格文となる。しかし、「～テクレル」を省略した「買ッタ」だけで表すと、（14a）の「～テアゲル」を省略した場合と比べ、適格性が下がる。韓国語の（17b）も日本語と同様に「사 주었다（sa-(a)cwu-essta）[買ッテクレタ]」は適格文である。それに対し、「-e cwuta」を省略した「샀다（sa-(a)ssta）[買ッタ]」だけで表すと不自然となる。つまり、行為が「二人称→一人称」方向で行為が完了している場合は、日本語と韓国語はともに「～テクレル」と「-e cwuta」が必要なのである。

続いて、行為が完了していない場合を考察してみよう。行為が「一人称→二人称」方向の日本語（18）は、「買ッタ／買ッテアゲタ」の両方が適格文であり、「～テアゲル」を用いても用いなくても文が成立する。つまり、行為が完了している場合と同じ結果である。一方、韓国語（19）は「샀

►12 「사 줬어（sa-(a)cwess-e)」は、「사 주었어（sa-(a)cwu-essta)」の縮約形である。

다（sa-(a)ssta）［買ッタ］」は適格文であるのに対し、「사 주었다（sa-(a)cwu-essta）［買ッテアゲタ］」で表すと不自然となる。これは、行為が完了している場合とはまったく逆の結果である。

この（19）の例は、以下に示す韓（2008）の主張が絶対的ではないということを裏付ける決定的なデータである。韓（2008）によると、一人称から二人称へモノが移動し、行為が既に完了している以下の（22）［16a］のような場合は、「-e cwuta」と結合している文のみが適格であるとする。それは、2項動詞の「사다（sata）［買ウ］」だけではプレゼントの移動を表すことができないため、プレゼントの移動を表す「-e cwuta」は省略不可能となると説明している。

（22）［16］a. 내가 너에게 선물을 {＊샀다/사 주었다}.
nay-ka ne-eykey senmwul-ul {*sa-(a)ssta/sa-(a) cwu-essta}.
私-が あなた-にプレゼント-を {＊買う-た／買って 与える-た}
（韓［2008：82］）

前述した説明からもわかるとおり、韓（2008）は（22）［16a］においても行為が完了している場合のみを前提に文法性判断をしている。しかし、（22）［16a］の文を「行為が完了していない」という条件で実際に調査してみたところ、以下のような結果が得られた。行為が完了している場合において省略不可能だった「-e cwuta」は、行為が完了していない場合には（19a）が示すように省略可能である（56.4%）。逆に、「-e cwuta」を用いた文の方が不自然という結果が出た（10.9%）。これは、日本語のみでなく、韓国語の場合も補助動詞が省略できる場合があるということを示している。また、韓（2008）が主張するように「-e cwuta」が必ずしも具体物の「移動」を意味するとは限らず、「行為の完了性」によってその選択が決定されると言えよう。

次に、行為が「二人称→一人称」方向の日本語（20）では「買ッテクレタ」も、「～テクレル」を省略した「買ッタ」も不自然である。これは、韓国語においても同じ結果が得られた。つまり、（21）のように「-e cwuta」を省略した「샀다（sa-(a)ssta）［買ッタ］」の文も、省略していない「사 주었다（sa-(a)cwu-essta）［買ッテクレタ］」の文も不自然となるのである。

以上、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」がそれぞれ共起している文と共起していない文の相違について考察した。では、このような違いはどのような要因によって引き起こされるのであろうか。このような両言語の相違は、「行為の方向性」制約及び「行為の完了性」制約によって引き起こされるものと思われる。以下でそれについて検討する。

6.2. 「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」に関与する制約

ここでは、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」にはどのような制約が関与するかについて考察する。

まず、行為が完了している場合、日本語では、(14) のように「ウチのもの（私)」が主語となり、「ウチ」から「ソト」に向かって「行為の方向性」がある構文をとる。この場合、「〜テアゲル」使用は必須ではなく、「〜テアゲル」を用いても用いなくても良い。つまり、このような構文は「無標（unmarked)」と「有標（marked)」のどちらの標識を用いても表現可能である。行為が未完了である (18) の場合も同様である。次に、(16) のように「ソトのもの」が主語となり、「ソト」から「ウチ」へと「行為の方向性」があるものは、「〜テクレル」が必須である。つまり、このような構文は「有標」として標識を立てなければならない。そして、(20) に見られるように、行為が未完了の場合は両文とも標識を用いることができない。相手が記憶喪失になった人でない限り、(20) のように表現することはできないのである。

一方、行為が完了している場合、韓国語では、(15) のように「ウチのもの（私)」が主語となり、「ウチ」から「ソト」に向かって「行為の方向性」がある構文をとる。この場合、「-e cwuta（〜テアゲル)」使用は必須である。しかし、行為が完了していない場合 (19) は、逆に「-e cwuta（〜テアゲル)」を用いると不自然となる。つまり、「＋行為の完了性、[ウチ: 主語、ウチ→ソト]」の場合は「有標」、「－行為の完了性、[ウチ：主語、ウチ→ソト」の場合は「無標」の構文を使用しなければならないのである。

次に、行為が完了している (17) のような「ソトのもの」が主語となり、「ソト」から「ウチ」へと「行為の方向性」がある文では、「-e cwuta」が必須である。つまり、このような構文は「有標」の構文を使用しなければならない。そして、(21) に見られるように、行為が未完了の場合は、日本語の (20) と同様に、両文とも不自然となる。

以上でわかることは、全体的に日本語は「行為の方向性」制約に影響されやすく、韓国語は「行為の完了性」制約に影響されやすいということである。つまり、日本語は「行為の方向性」が「主語：ウチ、与格目的語：ソト、ウチ→ソト」なのか、「主語:ソト、与格目的語:ウチ、ソト→ウチ」なのかによって「〜テアゲル・クレル」の選択が異なるのである。一方、韓国語は「行為が完了しているか完了していないか」によって「-e cwuta」の選択が変わってくる。

以上、日本語の「〜テアゲル・クレル」構文と「-e cwuta」構文に違いを生じさせる要因として、「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約があることがわかった。両言語の一人称と二人称間の「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約をまとめると (23) のようになる。表の縦軸は「行為の方向性」制約を示し、横軸は「行為の完了性」制約を示す。

(23)　一人称と二人称間

行為の完了性 / 行為の方向性	日本語		韓国語	
	完了	未完了	完了	未完了
主語：ウチ、与格目的語：ソト ウチ　→　ソト	無標 有標	無標 有標	有標	無標
主語：ソト、与格目的語：ウチ ソト　→　ウチ	有標	？	有標	？

（24）と（25）は、両言語の「一人称と三人称間」及び「二人称と三人称間」における「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約を示したものである。

（24）一人称と三人称間

行為の完了性 / 行為の方向性	日本語		韓国語	
	完了	未完了	完了	未完了
主語：ウチ、与格目的語：ソト ウチ → ソト	無標 有標	無標 有標	有標	無標
主語：ソト、与格目的語：ウチ ソト → ウチ	有標	有標	有標	？

（25）二人称と三人称間

行為の完了性 / 行為の方向性	日本語		韓国語	
	完了	未完了	完了	未完了
主語：ウチ、与格目的語：ソト ウチ → ソト	有標	無標	有標	？
主語：ソト、与格目的語：ウチ ソト → ウチ	有標	無標 有標	有標	無標

両言語の「一人称と三人称間」及び「二人称と三人称間」の授受構文においても、日本語は「行為の方向性」制約に影響されやすく、韓国語は「行為の完了性」制約に影響されやすいということが確認できる。つまり、日本語は縦の「行為の方向性」制約に敏感であり、韓国語は横の「行為の完了性」制約に敏感であるということを示す。

7 まとめ及び今後の課題

本稿では、日本語の「～テアゲル・クレル」と韓国語の「-e cwuta」の意味機能について十全な説明を与えるため、今まで取り上げられてこなかった行為の「方向性」と「完了性」という観点から、両言語を比較した。「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」の間にどのような相違が見られるかを分析するため、両言語の母語話者に質問紙調査を行った。本稿が注目する行為の「方向性」と「完了性」における相違を確認するため、別の変数も導入した。質問紙には、「行為が完了している場合･完了していない場合」、「授受補助動詞の無標形式・有標形式」、「一人称・二人称・三人称」という条件を設けた。考察の結果、以下のことが明らかになった。

1）「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」は、「行為の方向性」制約、「行為の完了性」制約の関与の仕方が異なる。
2）日本語の「～テアゲル・クレル」は「ウチ」と「ソト」間の「行為の

方向性」制約が強く働く傾向がある。つまり、「主語：ソト、与格目的語：ウチ、ソト→ウチ」の方向性を持つ「～テクレル」は主に「有標」として標識を立てなければならないため、絶対的であるといえる。それに対し、「主語：ウチ、与格目的語：ソト、ウチ→ソト」の方向性を持つ「～テアゲル」は、状況によって「有標」、「無標」の標識を使い分けるため、相対的であるといえる。このような「行為の方向性」制約は、韓国語の「-e cwuta」には見られない特徴である。

3）韓国語の「-e cwuta」は「行為の完了性」制約が強く働く傾向がある。「-e cwuta」は完了のアスペクトを表す要素であり、「行為の完了性」制約はこの補助動詞のアスペクチュアルな特性に由来する。行為が完了している場合は、全ての文において「-e cwuta」が必須であるのに対し、行為が完了していない場合は、「-e cwuta」は用いられない。日本語の「～テアゲル・クレル」の場合、このような傾向は見られない。

以上のことから、「～テアゲル・クレル」は、最初に「行為の方向性」制約が関与し、「恩恵性」は二次的に発生するものであると思われる。一方、「-e cwuta」は「行為の完了性」制約が先に関わり、「移動」の意味はその後に生じてくるものであると考えられる。即ち、従来から言われている日本語の「恩恵」という意味的特徴は「行為の方向性」に集約できると言える。また、韓国語の「移動」という意味的特徴は「行為の完了性」に集約できると言えよう。

本稿では、紙幅上の制約から「一人称と二人称間」での分析に限定して詳細を記述した。今後は「一人称と二人称間」及び「二人称と三人称間」での分析についても、より包括的な記述を目指したい。また、今回は、授受補助動詞の中でも、「～テアゲル・クレル」と「-e cwuta」に限って比較したが、今後の課題として、授受動詞全般についても比較してみたいと考えている。

（2009年4月8日受理、2009年5月27日最終原稿受理）

参考文献

新屋映子・姫野伴子・守屋三千代（1999）『日本語教科書の落とし穴』アルク.

井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂.

林　八龍（1980）「日本語・韓国語の受給表現の対照研究」『日本語教育』40号、日本語教育学会、pp.113-120.

大江三郎（1975）『日英語の比較研究－主観性をめぐって－』南雲堂.

奥津敬一郎（1983）「授受表現の対照研究―日・朝・中・英の比較―」『日本語学』2（4）、明治書院、pp.22-30.

韓　京娥（2008）「日本語の「～てあげる・くれる」と韓国語の「－아／어　주다-a/e cwuta」の意味機能」『日本語教育』136号、pp.78-87.

金　昌男（2001）『現代日本語における授受動詞について：韓國語との對照を通して』博士学位論文、千葉大學.

久野　暲（1978）『談話の文法』大修館書店.

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味』　第1巻、くろしお出版.

豊田豊子（1974）「補助動詞『やる・くれる・もらう』について」『日本語学校論集』pp.77-96.

原田登美（2006）「恩恵・利益を表す＜授受表現＞と＜敬意表現＞の関わり―特に「テクレル」を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る―」『言語と文化』第10号、甲南大学国際言語文化センター、pp.117-138.

牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学－文法を文化で切る－』アルク.

松下大三郎（1928）『改選標準日本文法』中文館書店.

宮地　裕（1965）「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」『国語学』63、pp.21－33.

森越一世（1994）「授受動詞の指導方法－「くれる」を第一に導入する試み－」『北海道大学留学生センター年報』第2号（92／93）、pp.153-165.

山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院.

金銀珠（2007）「視点を含意する表現の日韓対照研究－韓国人日本語学習者の授受表現、受身文、貸し借り表現などを題材に－」日･韓次世代学術FORUM第3回国際学術大会、『次世代人文社会研究』第3号、pp.247-263.

남기심・고영근（1985）『표준 국어문법론』(주) 탑출판사.

박선옥（2005）『국어 보조동사의 통사와 의미 연구』도서출판 역락.

방운규（1994）「보조동사 '주다'에 대한 연구」『建國語文學』Vol.17, 건국대국어국문학연구회, pp.181-203.

성태수（2000）「<주다> 동사에 관하여」『인문사회연구』Vol.2, 남서울대학교 인문사회과학연구센터, pp.25-43.

손세모돌（1991）「보조동사 "주다"의 결합 제약과 의미」『韓國學論集』Vol.19, pp.33-61.

이익섭（2005）『한국어 문법』서울대학교출판부.

이주행（2000）『한국어 문법의 이해』도서출판 월인.

李孝貞（2005）『授受動詞에 관한 一考察：日本드라마 속의 場面 分析』석사학위논문, 중앙대학교 교육대학원.

林美淑（2000）『日本語の授受表現の中間言語に關する研究―韓國人日本語學習者に見られる授受表現の習得過程を中心に―』석사학위논문, 조선대학교 교육대학원.

최현배（1929）『우리말본』정음사.